

民族的思慕と郷土・祖国の愛歌

— 『1944年』と『ああ、麗しきクリミア』—

石 渡 利 康

Toshiyasu ISHIWATARI. The Two Songs of Amor Patrio: '1944' and 'Ey Grüzél Kirim'. *Studies in International Relations* Vol.37, No.2. February 2017. pp.65-70.

This short paper aims at considering the longing for our hometown as the basis of amor patrio, viz. patriotism. With this purpose in mind, I take up two famous Crimean Tatal popular songs: The first is Jamalas '1944' and the second is 'Ey Güzel Kirim' (Ah Beautiful Crimea), and comment on them. Both songs are about the deportation of the Crimean Tatars (Surgun) in 1944. The translation is mine with the help of my female Crimean friend living in Sweden.

1. はじめに—考察の契機—

2016年の春、北欧はストックホルムで開催された第61回「欧州歌謡コンテスト」(Concours Eurovision de Chanson, Eurovision Song Contest)で、ウクライナの女性歌手ジャマラ(Jamala)が優勝した。

欧州歌謡コンテストは、「欧州放送連合協会」(European Broadcasting Union)が主催するものである。第1回大会は1956年スイスのレガノで開催された。大会の名称から分かるように欧州諸国が含まれるが、北アフリカの諸国も幾つか参加している。地域的には純粋な欧州よりも若干広がっている。

欧州歌謡コンテストといっても、日本ではあまり知られていないようである。しかし、実は世界的によく知られたコンテストなのである。

優勝者の中には1964年のコペンハーゲン大会においてNon ho l'eta(夢見る想い)を歌ったイタリアのジリオラ・チンクエッティ(Gigliola Cinquetti)、1974年『Waterloo』でブライトン市を湧かしたABBA、1988年ダブリンでのセリーヌ・ディオーン(Celine Dion)などがあることから分かるように、極めて水準の高い国際的コンテストである。

優勝歌謡は、若年者ばかりでなく社会一般に受け入れられるものが圧倒的に多い。そして、今年の5月14日に行われた決勝戦で優勝したジャマラ

の歌もその例外ではないといえよう。

彼女が歌った歌の名のは、「1944年」である。多少とも変わった歌謡名であるが、そこにはジャマラの体に流れる少数民族クリミア・タタールの血の民族的感情が読み取れるのである。

一般的にいて、歌謡表現には、状況表現、感情表現、心象表現、幻想表現など様々なものがある。もっともこれらの表現は、個々に独立したのではなく、混合したり交錯したりしている場合もある。「1944年」は、心象表現の範疇に入るものである。

この小さな考察は、ジャマラの「1944年」を切っ掛けに、もう1つのクリミア・タタールを歌った名曲を加えて祖国思慕、祖国愛の問題をほんの少しばかり考えて見ようとするものである。

2. 『1944年』の歌詞

まず『1944年』を通して民族、特に少数民族の心象表現の一端を垣間見ることにしよう。

優勝歌謡であるジャマラの『1944年』の歌詞は、英語とクリミア・タタール語の混ざったもので次の通りである。なお、歌詞と曲はジャマラ自身によるものである。つまりジャマラは、シング・ソングライターなのである。

When strangers are coming
They come to your house
They kill you all
And say
We're not guilty
Not guilty

Where is your mind?
Humanity cries
You think you are gods
But everyone dies
Don't swallow my soul
Our souls

Yaşuliğima toyalmadim
Men bu yerde yaşalmadim
Yaşliğima toyalmadim
Men bu yerde yeşalimadim

We could build a future
Where people are free
To live and love
The happiest time

Where is your heart?
Humanity rise
You think you are gods
But everyone dies
Don't swallow my soul
Our souls

Yaşliğima toyalmadim, ooh
men bu yerde yaşalmadim
Yaşliğima toyalmadim
Men bu yerde yaşalmadim

Yaşliğima toyalmadim, oh, oh
men bu yerde yaşalmadim
yaşuliğima toyalmadim
Vatamima toyalmadim

歌詞の直接的な拙訳は、次のようである。なお、現在ではキリル文字に代わってラテン文字の正字で書かれるようになったクリミア・タタール語の部分の訳は、正確を期するためにスウェーデンに住んでいるクリミア・タタール人 (qirimtatar) 女性である友人の助力を得た。

見知らぬ人がやってくる
あなたの家にやってくる
あなたがたを皆殺しにして
云う
おれ達は無罪だ
無罪だ、と

あなたの心はどこにある？
人間性は叫ぶ
あなたがたは善人だと思っているが
みな死んでいく
私の魂を飲み込まないで
私の魂を

私は青春を祖国で過ごせなかった
平和を奪われたから
私は青春を祖国で過ごせなかった
平和を奪われたから

私たちは未来をもつことができたのに
そこでは人々は自由に
生きそして愛する
至福の時をもてたのに

あなたの心はどこにある？
人間性は叫ぶ
あなたがたは善人だと思っているが
みな死んでいく
私の魂を飲み込まないで
私の魂を

私は青春を祖国で過ごせなかった
平和を奪われたから
私は青春を祖国で過ごせなかった
平和を奪われたから

私は青春を祖国で過ごせなかった
平和を奪われたから
私は青春を祖国で過ごせなかった
祖国をもてなかったから

3. ジャマラと国際関係、周辺事項

ジャマラは、芸名である。本名は、クリミア・タタール語でSusanna Camaladinova、ウクライナ表記ではСусана Алімівна Джамаладиноваである。彼女の国籍はウクライナであるが、クリミア・タタール人の父親とアルメニア人の母親との間にキルギジスタンで1983年に生まれ育った。

幼年時代から音楽の素養に富んでいたジャマラは、ウクライナのチャイコフスキー国立音楽アカデミーでオペラ歌手としての訓練を積み、卒業した。その後、ポップやソウルへも関心が広がっていった。

彼女が父親の血を引くクリミア・タタール人とクリミアとは、どのような歴史をもつのであろうか。簡単に紐解いてみよう。

タタール人は、モンゴル高原からバルト地域のリトワニアまでの広域にかけて活動したチュルク、モンゴル系の民族である。彼らは、通常3つのカテゴリーないしはグループに分けられる。それらは、シベリア・タタール（アルタイ、シベリア）、ヨーロッパ・タタール（カザン、アストラチェン、クリミア）、それにカフカス・タタールである。クリミア・タタール人（qirimtatar, qirmli）は、ヨーロッパ・タタールに属するのである。

黒海に面するクリミアは、紀元前5世紀頃にはギリシャの植民地だったが、時が経ち中世にはクリミア・ハン国として知られた。1783年には、ロシア帝国との合併が行われた。1921年から1945年は、ソ連邦の中でクリミア自治ソビエト社会主義共和国であった。

悲劇は、1944年に起こった。スターリンが、ナチス・ドイツに協力しているとの口実を理由にクリミア・タタール20万人を中央アジアへ強制移住をさせたり、収容所に送ったりした年である。この「クリミア・タタール人追放」という事象は、surgunと呼ばれている。20万人のクリミア・タ

タール人の約半数が死亡した。これは、紛れもなく民族浄化である。ジャマラの縁者たちも暴挙の犠牲になった。

クリミアは、1945年にクリミア自治州となった。そして、1954年には、ウクライナに移管された。1967年には、クリミア・タタール民族の権利回復がなされたが、ソ連邦が崩壊するまで帰還は禁止されたままであった。

1991年1月20日、クリミア州住民による住民投票が行われ、2月12日ウクライナ議会はクリミア自治ソビエト社会主義共和国が再建された。1991年のソ連邦崩壊に伴い、ウクライナ議会は8月24日独立を宣言し、クリミアはウクライナの一部となった。

1992年5月5日、クリミア議会は、ウクライナから独立し、クリミア共和国の成立を宣言した。しかし、10日後、ウクライナ議会はクリミアの独立を無効とする決議を行い、結局クリミアはウクライナ内の自治共和国を認めることとなった。

2014年3月11日、クリミア自治共和国議会はウクライナからの独立を宣言した。そして、3月16日、住民投票でクリミア共和国として独立し、ロシアへの編入を求める議会決議を行った。3月18日、ロシアはクリミア編入を宣言した。

ちなみに、クリミアの民族構成は、概数でロシア人58%、ウクライナ人24%、クリミア・タタール人12%、その他である。クリミア・タタール人は、クリミアにおける少数民族ということになる。

『1944年』は、こうした歴史を背景に作詞されたものである。歌詞の中に出てくるstrangersとは、誰のことか。ソ連軍であることは、明白である。被害を受けるのは、クリミア・タタール人である。歌詞に挿入されているクリミア・タタール語の存在が、否定し得ない証左となっている。

出来上がった歌詞を見せられたジャマラの母親は、クリミア・タタール語の歌詞を入れることに疑問をもった、とジャマラはメディアとのインタビューの中で語っている。母親はクリミア・タタール語が少数言語なので、多くの人に理解されないのではないかと危惧したのである。しかし、Jamalaはこの言語を歌詞の一部とすることにこだわったという。

『1944年』は、国際関係の中で理不尽な処遇を受けた少数民族の民族的苦悩と祖国への思慕を歌った心象歌謡である。スウェーデンの日刊誌Dagens Nyheterのインタビューの中で、ジャマラは『1944年』という歌は反戦と平和の希求であると同時に、2014年のロシアによるクリミア編入にも反対の念が及んでいる、と話している。

4. 『ああ、麗しきクリミア』 (Ey Güzel Kirim)

ジャマラの『1944年』について調べているうちに、クリミア・タタールの美しい歌『ああ、麗しきクリミア』(Ey Güzel Kirim)に行き当たった。ある事象に専念していると、関係資料や参考になる事柄が向こうの方から現われてくることがある。不思議な現象である。専念する意思と研究対象との間に、心の触合い、すなわちシンパシーが存在しているに違いない、と私なりに解釈している。『ああ、麗しきクリミア』も、そうした一例であった。

『ああ、麗しきクリミア』のクリミア・タタール語の歌詞は、次の通りである。

Aluşta esken yeller yüzüme urdi
Balalıqtan ösken evge hozyaşım tüşti
Men bu yerde yaşalmadım
Yaşlıgıma toyalmadım
Vatanima asret oldim
Ey güzel Qirim

Baqcalan, meyvalan bal ile şerbet
Sulanni içe içe toyalmadım men

Men bu yerde yaşalmadım
Yaşlıgıma toyalmadım
Vatanima aret oldim
Ey, güzel Qirim

Bala-çağa Vatanım dep
Közyaşın töke
Qartlammiz ellin cayıp

Duvalar ete

Men bu yerde yaşalmadım
Yaşlıgıma toyalmadım
Vatanima asret oidim
Ey, güzel Qirim
Köze köze toyalmadım
Heryerlere baralmadım
Vatanima asret oldim
Ey, güzel Qirim

拙訳は、以下のようである。

アルシュタの風が私の顔を撫でる
小さい時から育った土地に涙が落ちる
この土地で生きられなかった
小さい時は満たされなかった
祖国が恋しい
ああ、麗しきクリミア

庭の果物、蜂蜜にシャーベット
水を飲んでも、満たされなかった

この土地で生きられなかった
小さい時は満たされなかった
祖国が恋しい
ああ、麗しきクリミア

子供たちの祖国を想い
涙が落ちる
老人が手を挙げ
神に祈る

この土地で生きられなかった
小さい時は満たされなかった
祖国が恋しい
ああ、麗しきクリミア
いくら歩いても満たされなかった
全ての所には行けなかった
祖国が恋しい
ああ、麗しきクリミア

ファトマ・ハリロヴァ（Fatma Halilova）の歌詞にサクル・オスマノヴ（Sakru Osmanov）が曲を付けたこの歌は、離散したクリミア・タタール民族の悲しみと民族的祖国への思慕を語ったものである。作詞・作曲されたのがいつなのかは、現在までのところ調べがつかない。

しかし、ジャマラの『1944年』より以前に作詞・作曲されたものようである。とすれば、『1944年』は『ああ、麗しきクリミア』の影響を受けているとも想像できるのである。

5. おわりに

—祖国思慕愛の根源としての郷土愛—

クリミア・タタールのこれら2つの歌は、民族的色彩を加えた郷土への思慕、すなわち郷土愛ないしは祖国愛を歌ったものである。愛国心を高揚する歌とは、種類を異にする。日本を例にとり、考えてみよう。国際関係が緊張したりすると、愛国心という言葉が云々される。しかし、愛国心という概念の内包は、古来から日本にあったものではない。明治時代になって、国家統治に都合がいのように官製概念として作られたものである。

明治以前の各藩が一種の自治性をもって存在していた時代に、多くの人々の心に愛国心が存在していたとは思えない。武士階級は藩に対する思慕をもち、庶民、農民は自分が属する町や村落に帰属性と愛着心をもって生きていたのである。町並み、山河、四季ごとに変わる景色、そうした情景と心情が合い寄ったのが郷土愛である。映画の「風天の寅さん」が懐かしむ芝又への思慕みたいな感情といたら分かりやすいであろう。

郷土愛を基礎に成立するのが、祖国愛である。イタリアの作曲家フランチェスコ・アモローソ（Francesco Amoruso）のAmor Patrio Overture（祖国への愛序曲）を聴くと、感性的にこのことが理解できる。祖国愛は、国益を最重要視するナショナリズムとは、異なったものである。「愛国心より祖国愛を」という思考を、クリミア・タタールの2つの歌は歌い上げているように感じられる。

参考文献・資料

【映像付き音楽、クリミア・タタール語歌詞(DVD)】:

- Jamala -1944 (Ukraine) 2016 European Song Contest. you tube. 2016 (最終確認 2016-8-25)
- Ey, güze Kirim. you tube (最終確認 2016-9-12)

【日本語】:

- 石渡利康：「状況表現，感情表現，心象表現」雑考，国際文化表現学会会報，Vol.42 2015 No.2. pp.6-8.
- 石渡利康：「Jamalaの『1944年』とRaimonds Paulusの『Davaja Marina』」，第20回日本情報ディレクトリ学会全国大会研究報告予稿集，2016年，pp.47-52.
- 黒川祐次：『物語 ウクライナの歴史』，中央公論社，2002年。
- 小松久男編著：『テュルクを知るための61章』，明石書店，2016年。
- 末沢恵美：「クリミア・タタール人の強制移住と帰還問題」，海外事情 48(10)，2000年，pp.95-107.
- 藤原正彦：『国家の品格』，新潮社，2006年。

【フランス語】:

- Banu, Cezar Aureli: Passée traumatique, memoire, histoire confisquée et identité volée; La deportation des tatars de crimee par Staline en mai 1944 (Le 《SURGUN》), Conserveries memorielles, Ruvue transdisciplinaire. 2005. Nr.1. (PDF. 最終確認 2016-06-29)
- Dufund, Gregory: La deportation des tatars de Crimee et leur vie en exil (1944-1956). Cairn. info (html). Vingtième Siecle. Revue d'histoire. 2007.
- Marie, Jean-Jaques: Les peuples deportés d'union sovietique. Edition Complexe. 1995.

【スウェーデン語】:

- Dagens Nyheter. Kultur (Jamala interview av Ann-Lena Lauren). 2016-06-04.

【英語】:

- Fisher, Alan. W.: The Crimian Tatars (Studies of Nationalities). Hoover Press, 2014.
- Official Website Jamala (最終確認 2016-06-30)
- Kulyk, Voldymir: "The Politics of Ethnicity in Post-

Soviet Ukraine: Beyond Bruba-ker”. *Journal of Ukrainian Studies*. 26, Nos.1-2 (Sommer-Winter), 2001, pp.197-221.

- Osipov, Alexander: “What do the Cremian Tatars face in Crimea?”. *ECMI-Issue Brief #32*, 2014, pp.1-21.
- Plakans, Andrejs: *The Latvians. A Short History*. Hoover Institution Press. 1995.
- Uehling, Greta Lynn.: *Beyond Memory: The Crimian Tatars’ Deportation and Return*. Palgrave Macmillan. 2004.
- Williams, Brian G.: “A Community Reimagined. The Role of “Homeland” in the For-ging National Identity. The Case of the Crimean Tatars”. *Journal of Muslim Minolity Affairs*. Vol.17, No.2, 1997. pp.225-252.